

歯学部校舎第1期工事竣工

2018(平成30)年1月

2018(平成30)年春、歯学部校舎の第1期改修工事が竣工した。歯学部校舎の改修については蔵本地区全体で検討が行われ、全体を第1期～第3期に分割して実施する予定である。

多くの学生の学び舎であった歯学部校舎は、1979(昭和54)年に建築されてから40年を経て、設備面で現状の教育研究に適さない部分が生じ、また老朽化も激しく、教育と安全の観点から改修は急務であった。2016(平成28)年に改修計画を開始した第1期工事は、主として歯学部校舎東側にあたる旧歯学部付属病院部分へ、各分野の研究室や事務室を移設するべく着工された。対象となったのは、口腔分子生理学分野、分子医化学



分野、顎機能咬合再建学分野、口腔顎顔面補綴学分野、口腔保健学科の一部といった各分野の研究室等、歯学部事務室、学部長室、講義室・実習室や歯科スキル・ラボ等の学習スペースである。特に改修後の実習室は、室内の広さ、機器ともに充実し、臨床実習に適した環境が実現された。

歯学部の特長な取り組みとして、福祉の充実から高齢化の進む地域社会や国際社会における生活の質の向上に寄与することを目的とし、2015(平成27)年度から長寿福祉口腔保健学の学際領域を推進する人材養成に関わる教育・研究機関として、口腔科学教育部に口腔保健学専攻(博士後期課程)を新設したことがあげられる。医療系3学部が集積する蔵本地区共通の課題である「他職種連携」等の機能強化を図るため、歯学部校舎の改修に併せて福祉対策研究の拠点施設としての機能を付加し、高齢化社会の問題解決を先導する人材を育成するための教育研究環境を創出する、という構想があった。この「医と食のステーション」構想は、2019(令和元)年に始動した第2期改修工事で実現される予定である。また、同様に国際交流の場となる「グローバルステーション」を設置し、海外からの留学生等の拠点とするとともに、英語による生きたコミュニケーションを実践できる場として機能させることを想定している。改修後の歯学部校舎を、対内外的な連携の場として活用し、学生の教育のみならず、健康と社会福祉、多様な共同研究プロジェクトが実施可能となることを目指す。

